

# 服飾手芸の研究：被服構成におけるキルティングについて

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 泉山 幸代, 北村 悦子, 大信田 静子  |
| 雑誌名 | 北海道女子短期大学研究紀要   |
| 巻   | 20  |
| ページ | 43-52   |
| 発行年 | 1986  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00001804/">http://id.nii.ac.jp/1136/00001804/</a> |

# 服飾手芸の研究

—— 被服構成におけるキルティングについて ——

A Study of Handicraft in Dressmaking

—— Quilting Skills in Dressmaking ——

|         |           |        |          |         |        |   |   |   |   |   |   |   |
|---------|-----------|--------|----------|---------|--------|---|---|---|---|---|---|---|
| 泉       | 山         | 幸      | 代        | 北       | 村      | 悦 | 子 | 大 | 信 | 田 | 静 | 子 |
| Sachiyo | IzumiYAMA | Etsuko | KITAMURA | Shizuko | OSHIDA |   |   |   |   |   |   |   |

## I はじめに

服飾手芸は古く紀元前数千年前に始まり、それ以後、時代の政治・宗教・風俗・習慣などと密接な係わりをもちながら衣服の変遷とともに発達してきた。

現存されている実物史料をみても、その手法は、現在の服装形態に多くの影響をおよぼしたと思われるものが少なくない。現在も用いられている手法が、衣服の移り変わりの中で、どのような経緯をたどって発展していったかを明らかにすることは、被服構成に携わる者として、また、今日の衣服を考える上で重要な意味をもつことと思われる。

本研究では、北国の防寒着の服装形態に多く用いられている服飾手芸の中のキルティング技法に着目し、その歴史を理解した上で、実物作品の製作を試み、考察を行ったので報告する。

キルティング技法の起源と変遷をたどり、今日の衣服デザインに展開して再認識し、さらに新しい技法を習得したいと思うからである。

方法としては変遷は、文献及び実物史料による。作品はキルティング技法4種類を用いて試作した。

## II キルティングの技法

キルティング (Quilting) とは、<sup>1)</sup>「保温、防護または純粹に装飾の目的で、2枚または3枚の布地を重ねて刺すこと」で、語源はラテン語の“Culcita”に由来し、詰め物をした袋という意味である。その技法は多種におよぶが、その中での数種類をみると、表布・中芯・裏布の三枚をいっしょにステッチで縫い合わせたイングリッシュキルティング (English quilting) (写真1) と、部分的に綿を入れ立体的な効果を表わすイタリアンキルティング (Italian quilting) (写真2) <sup>2)</sup>がある。その他技法の主なものは次のようである。

・パフキルティング (Puff quilting) ……衿、袖口などの端、ジャケット、コート類の前端に沿って線状にステッチをかけ詰め物をしたもの。

・パッチ・ワーク・キルティング (Patchwork quilting) ……小さな布を丹念につなぎ合わせ、キルトをして一つのパターンに構成する。

写真1 イングリッシュキルティング

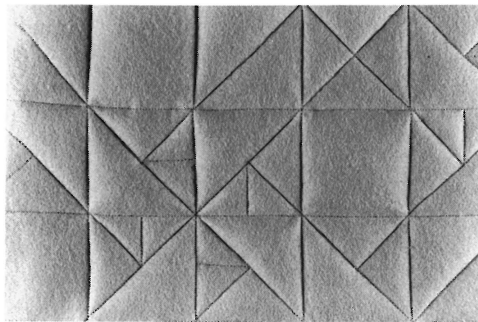


写真2 イタリアンキルティング

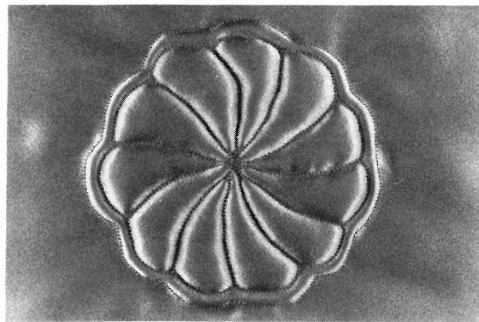


写真3 ファラオの彫刻



・アプリケ・キルティング (Appliqué quilting) ……ベースともう1色でアプリケすることが多く、対称的な柄にしたものが特徴である。

### Ⅲ 衣服におけるキルティングの変遷

#### 1. 防具としてのキルティング

キルティングは刺しゅうの1技法として、人が布を織る技術を発明した原始手芸のころに始まる。そして衣服の歴史の中でのキルティングは、紀元前3400年から3900年頃のエジプト第一王朝時代のファラオ (Pharaoh) の象牙の彫刻にみられる。王の着用しているマントの菱形の彫りのキルティング技法が、最も古いものと推察されている (写真<sup>3)</sup>)。

また、紀元前3500年頃、西アジア、メソポタミアのシュメール王朝時代の服飾にキルティングと思われる技法がみられ (図1<sup>4)</sup>)、スカートに似た腰布は皮や毛織物で作られ、中に詰め物をして縫うという、主に装飾としてこの技法が用いられたと思われる。

その後、7世紀頃、サラセン帝国の騎士が鎧の下に、キルティングをした絹地の内着を着用していたという。それは防寒と肩ずれを防ぐなど、鎧のあたりをやわらげるものであった。

11世紀における十字軍のエルサレム遠征は、ヨーロッパの服飾にも大きな影響を与える。新しい織物や染料などの交易による服飾の発達とともにキルティング技法もヨーロッパに伝えられた。つまりサラセンの騎士が着用していた内着のキルティング技法

図1 シュメール王朝時代の服飾



が、十字軍の戦闘時の防禦服に用いられるようになったのである。素材は皮・布などで、その中に綿や麻屑を詰めて動かないようにステッチをかけるという技法で、これは主に女性の手仕事であったと推察される。

そして次第に鎧下の内着から、鎧の代用となるものへ変化し、騎士から歩兵まで着用されるようになっていった。つまり防具のための技法としてキルティングが用いられたわけである。それは16世紀のミリタリー・スカート(写真<sup>1) 6)</sup>4)からもわかるように、両端にはキルティングがなされ、2本のコードでひだが寄せられており、スカート丈は約21インチ(53cm)である。

## 2. 上着にみられるキルティング

男子の上衣であるショートジャケットのプールボワン(Pourpoint)は、14世紀中頃から17世紀にわたり、少しずつ服装形態をかえながら流行した。

これまでのキルティングをした着衣は元来、武装の下に着た胴着であったが、それが一般化して表着となり着用されるようになったのが、プールボワンである。

プールボワンと言う言葉の意味は、刺子した布のことであり、ごく初期には鎖帷子(くさりかたびら)の下に打撲傷などを防ぐために着用した上衣で、形は胸が張り、ウエスト位置は細く強調し、上衣丈は短いもので、詰め物を入れて刺し、ビロード、錦織のような贅沢な布で仕立てられていた<sup>5)</sup>。14世紀中頃の、唯一のプールボワンは、フランスのリヨン博物館に所蔵されている。写真<sup>7)</sup>5)のシャルル・ド・ブロウ伯爵(Charles de Chafillon-Blois)のプールボワンは

写真5 シャルル・ド・ブロウのプールボワン  
(14世紀中頃)



写真4 ミリタリー・スカート

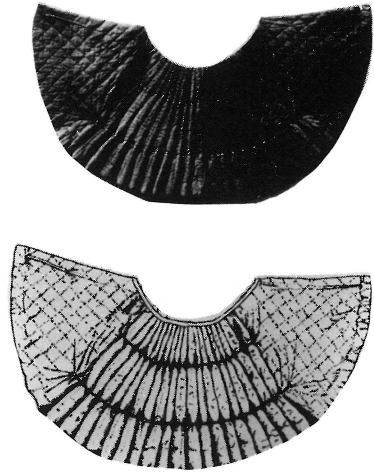


図2 シャルル・ド・ブロウのプールボワン

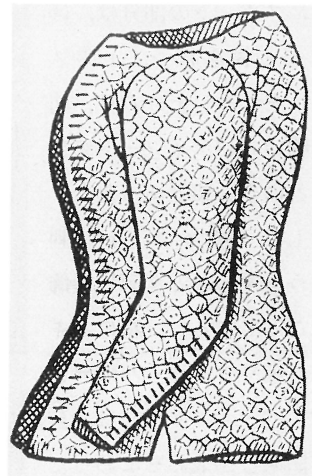




図2のように全体に詰め物がされ、ステッチがかけられており形態の特徴がわかる。

この史料は、表地が美しいクリーム色の錦織で、ライオンと鷲の紋章模様を織り込むという当時の織物技術と、前明きと袖口についている多くのボタンホールの縫製技術に高度さがみられる。

プールポワンは主に貴族の着衣であったが、同時代の市民服は、ジャークと呼ばれ、これも戦闘服から転化したもので、羊毛、麻、木綿などが詰め物されていた。これが後に、ジャケットの語源へと変化していった。

15世紀のプールポワンは、素材がヴェロア、絹、サティン、ダマスク、毛織物などが使われ、そして詰め物の特徴はいっそう誇張された。16世紀のプールポワンの詰め物材料は、馬毛・羊毛屑・綿屑・毛織布・亜麻布・木綿布など種々あって、詰める部分や重ね方により異なった材料を用いてより膨らみを出して威厳を示すのに最も効果的であった（図3）。

17世紀に入りプールポワンの形態は少しずつ変化をみせ、ウエスト部分はゆるく、上衣丈はかなり長くなっていった。このようにプールポワンは長期間にわたり、男子の上衣の服装形態をなし、詰め物がされているのが特徴である。又、17世紀後半の女性用の上衣にもキルティング技法がみられる。写真6は1690年頃のイギリスのもので、赤と緑で花柄を織り込んだ布には、全体にキルティングがされている。

### 3. 18世紀から19世紀の服装におけるキルティング

18世紀から19世紀にかけて女性の服装にみられるペティコートに多くのキルティング技法がみられる。

この時代のスカートの形態は、ポロネーズ・ローブやオープン・ローブの下にペ

ティコートを着用するというようにスカートの部分は、ほとんど2枚重ねで、上のスカートをたくし上げたり、前面を開いてペティコートを見せるという着装であった。

そしてペティコートは刺しゅうをするなど次第に装飾的になっていった。特にイギリス北部やヨーロッパの寒い地方のペティコートには、装飾と防寒とが兼ねそなわった

図3 プールポワン（16世紀）

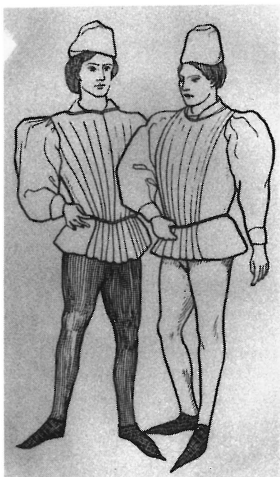


写真6 女性用キルティングジャケット（1690年頃）

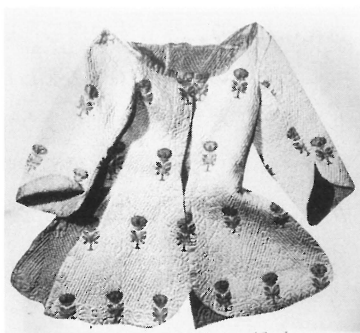


写真7 絵画にみられるペティコート（18世紀）



写真8 ① 18世紀中頃のローブとペティコート



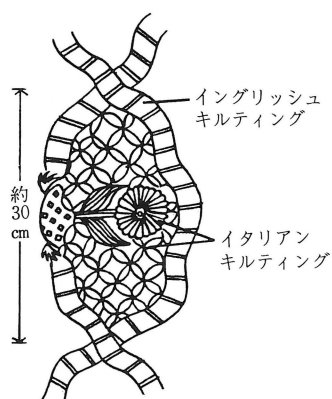
写真9 ② 1770年代のローブとペティコート



キルティング技法が多く用いられていることが特徴である（写真<sup>10)</sup>7）。

写真①・②・③（泉山撮影）は、イギリスのビクトリア・アンド・アルバート博物館が所蔵している実物史料である。<sup>11)</sup>①は1735年頃の錦

写真10 ③ 1780年代のコートとドレス

図4 ③コートの子ルテ  
イグ図案

ており、約6 cm間隔の格子柄にイングリッシュキルト技法が施こされている。このペティコートは18世紀半ばのものと推定される。<sup>11)</sup>②は1770年代後半と思われる中国風のプリント模様のポロネーズで、ペティコートはクリーム色のサ

テン地で、イングリッシュキルト技法が用いられているのがわかる。これらの技法は当時、ダイヤモンド型キルティングと呼ばれていた。<sup>11)</sup>◎は1780年の黄色いサテンのコートと、緑色のドレスで、キルティング技法に大きな特徴がみられる。コートの図案は、図4のような型で、大柄な菱形模様(約30cm)のイングリッシュキルティングの中の花柄の部分には、詰め物をして浮き彫りになるようイタリアンキルト手法が加わったことである。この技法は、18世紀前半から、中頃にかけて衣類以外(寝具類など)に用いられていた技法で、それが服飾手芸として取り入れられたことは、注目すべきことであろう。

また、写真11にもみられるように、暖かく着用するため、キルティングは上着にも用いられ、より一層装飾的になってきたことが判る。表地は、他の史料をみてもサテン地が多く、ステッチは手縫いであり、女性がかなりの時間を費して作ったとの記述も残されている。<sup>6)</sup>防寒着に取り入れられたキルティング技法については、次のような記録が残っている。<sup>6)</sup>

写真12は1848年1月15日付のイギリスの新聞、「レディズ・ニューズペーパー」に掲載されたものである。文面には、「茶色のサテン地のキルティングがあるコートは、最も寒い日の散歩でさえ十分に暖かい…。」(要訳)とある。

以上のことから、18・19世紀の婦人の日常着に、防寒と装飾性から、キルティング技法が、多く取り入れられ、流行していったということが判断できる。

## Ⅳ 作品製作

### 1. 作品

18・19世紀の服装に、キルティング技法が多く用いられていたことは前述の通りである。それはこの技法が、防寒と装飾とが兼ねそなわった技法であることに他ならない。また、現代の衣服デザインを考える上でも、共通のことと思われる。

技法を現代の作品に結びつけ、イングリッシュキルトを用いて防寒着として製作した作品と、技法を展開して装飾性を加えた、ディテールシャーリングキルトを用いた作品を製作した。

### 2. デザイン

#### 作品1

防寒を目的としたコートとオーバー・スカート、共に

写真11 ジャケットとスカート



写真12 「レディズ・ニューズペーパー」より



## —キルティング技法による作品—

写真14

作品 1

写真13



作品 2

写真15



写真16



上前身頃から後身頃にかけて斜めにシャープな切り替えを入れた（写真13・14）。

上部には全面に5.5cm幅のイングリッシュキルティングをし、下部にはウールと合成皮革（ラムース）で、10×7×5.6の三角形でパッチワークキルティングをした（写真18）。

また、パフキルティングを、カラーには出来上がり寸法3cm幅を3本、袖口には出来上り寸法4cm幅を2本、それぞれの裾には、出来上り寸法6cm幅を2本用いた。

袖はラグランスリーブにし、外側部分にイングリッシュキルティングをした（写真17）。

以上3種類のキルティング技法はミシンステッチとした。

### 作品2

フォーマルドレスには、上前身頃と後身頃左肩部分に、蝶の図案をシャーリングキルトをして、その上にビーズ刺しゅうをした（写真15・16）。

シャーリングキルト技法とは、図柄の内側に芯を入れ、図柄通りにつまみ縫いし、シャーリングする技法である（写真19）。

## 3. 素材

素材は作品1・2共にウールを使用した。それはキルティング技法により作品のデザインを、効果的に表現したいという意図のもとに選定した。

### 作品1

表布は、ブルーグレイ色のウール・ビーバー（ウール93%、ナイロン7%）

写真17 作品1のキルティング部分



写真18 作品1のキルティング部分

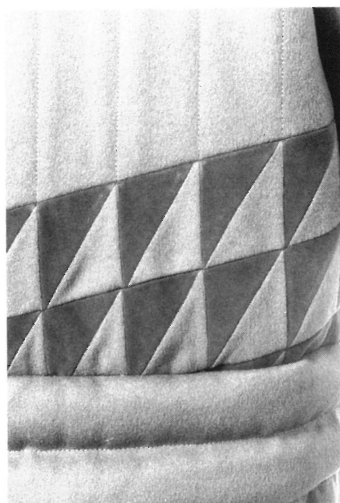


写真19 作品2のシャーリングキルト部分



表1 作品1の資料諸元

| 表           | 布                  | 材 | 質 | 組織 | 密      | 度            | 厚<br>(mm) | さ | 重<br>(g/5cm) |
|-------------|--------------------|---|---|----|--------|--------------|-----------|---|--------------|
| ウール<br>ビーバー | ウール 93%<br>ナイロン 7% |   |   | 平織 | 縦<br>横 | 47.2<br>35.6 | 1.13      |   | 200          |

表2 作品2の資料諸元

| 表             | 布        | 材 | 質 | 組織 | 密      | 度            | 厚<br>(mm) | さ | 重<br>(g/5cm) |
|---------------|----------|---|---|----|--------|--------------|-----------|---|--------------|
| ウールジョ<br>ーゼット | ウール 100% |   |   | 平織 | 縦<br>横 | 86.4<br>57.4 | 0.69      |   | 190          |

で140cm幅を4m, その諸元は表1の通りである。パッチワーク部分は, チャコールグレイ色の合成皮革ラムース(ポリエステル65%, ポリウレタン35%)で105cm幅70cm, 身頃の中芯は樹脂綿(テトロン100%)を用いた。パフキルティングの中芯はテトロン芯とした。

#### 作品2

表布は, ディープレッド色のハイシングル・ジョーゼット(ウール100%)で140cm幅を2.7m, その諸元は表2の通りである。シャーリングキルティング部分の中芯はドミット芯を使用した。

#### 4. 縫製部位の要点

作品には数種類の縫製を試みたが, その中でも特徴のある縫製について, 述べる。次の通りである。

##### 作品1

パフキルティング部分の縫製について(写真20・図5)。

①ステッチをかけたパフキルティング部分(表布・裏地・裏布)と, 身頃を縫い合わせる。

②ステッチをかけた裏布の中間に切り込みを入れる。

③切り込み口から中芯を詰める。

④切り込んだ部分を付き合わせにして, とじ合わせる。

⑤裏布の縫い代にロックミシンをかけ奥まつりとする。

##### 作品2

ディテールシャーリングキルト部分は, シーチングで立体裁断をしてシャーリングの分量を決めた。

総裏仕立てで, シャーリングの部分には, さらに中芯を加えることにより立体感を出した。

①表布の裏側に図案より, やや小さめに形どったドミット芯を入れその上にさらに1枚大きく裁断したドミット芯をのせて裏打ちをする。

②図柄通り表布・中芯・裏布を3枚一緒につまみ縫いをしてシャーリングをする。

③表からビーズ刺しゅうをする。

ディテールシャーリング技法は, 糸の引き加減, 図案の大きさと位置によってドレープの流れに変化がみられた。

写真20 パフキルティング縫製部分

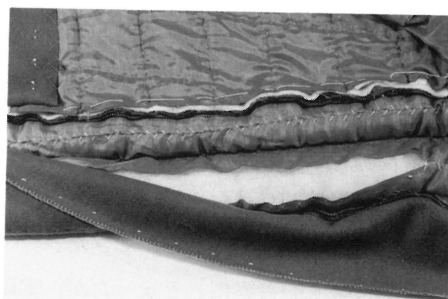
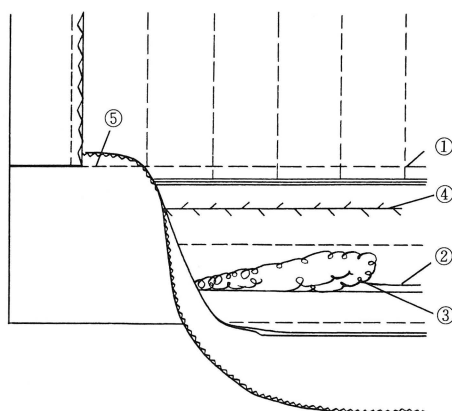


図5 パフキルティング縫製図



## V お わ り に

以上、被服構成におけるキルティングの歴史と、その技法を取り入れた実物作品製作を行なった結果、次のことが考えられる。

キルティング技法の変遷では、はじめは防具としてもちいられた技法が時代を追うごとにプールポワンにみられるように、服装形態に装飾性を加えるという点で発達していった。

そして、さらに防寒を考えての技法へと変化をみせていく。それは18世紀から19世紀にかけての婦人服の形態、特にペティコートにみられることから明らかである。

その技法は、ダイヤモンド型キルティングやイングリッシュキルティングに、イタリアンキルティングを取り入れるなど防寒と装飾が兼ねそなわったより高度な技法へと展開をみせていった。その技法を現代の作品に取り入れ、製作を試みると技法・表布・中芯・裏布の選定が大切であることがわかった。そして変遷による技法と共に、より装飾的な技法への展開が可能であることも理解することができた。

今回は基本的考察にとどまったが、本研究をさらに応用、発展させ今後も技術面の研究を続けていきたいと思う。なお本研究は第7回日本服飾学会で発表したものである。

最後に、この研究にあたり、御助言をいただきました筒井京子教授に、厚くお礼申し上げます。

## 文 献

- 1) パメラ・クラバーン：手芸百科事典，雄鶏社，1978
- 2) 大沼淳：手芸の百科，文化出版局，1981
- 3) Averil Colby : Quilting, Charles Scribner's Sons New York, 1971
- 4) 大沼淳：文化服装講座7手芸編，文化出版局，1980
- 5) 丹野郁：服飾の世界史，白水社，1985
- 6) Millia Davenport : The book of Costume, vol 1, New York Crown, 1948
- 7) 丹野郁：服飾の世界史，資料篇，白水社，1985
- 8) フランソワ・ブーシェ：西洋服装史，文化出版局，1965
- 9) 井上泰男：民族生活文化誌 西欧編，衣生活研究会，1985
- 10) C. wlrrett and Phirris cunningtoth : A Picture History of English Costume, Vista Books, 1960
- 11) William Callins : Four Hundred Years of FASHION, Victoria and Albert Museum, 1984

(1986・9・10)